Osaka University Knowledge Archive

Title	大分県日田市方言における「-てから」の用法 : 「-て」「-きー」「-けんど」「-けどが」との比較をとおして
Author(s)	黒木, 邦彦
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2008, 8, p. 89-100
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/23211
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

『阪大社会言語学研究ノート』第8号（2008年3月）89-100

大分県日田市方言における「-てから」の用法
── 「-て」「-きー」「-けんど」「-けどが」との比較をとおして ──

黒木　邦彦

【キーワード】句、節、時間的関係、条件、並列

【要旨】

本稿では、類義形式「-て」「-きー」「-けんど」「-けどが」との比較をとおして、日田方言の「-てから」の用法を記述した。その結果、以下のことが明らかになった。

1) 日田方言の「-てから」は、標準語の「-てから」よりも用法が広い（1節; 3節）。
2) 相対的に見て許容度が低い付帯状態と並列は、日田方言の「-てから」にとって周辺的な用法である（4.1節; 5.3節）。
3) 日田方言の「-てから」は、付帯状態、手段・方法、同時、開始時点、原因・理由、並列の用法において、「-て」と同様に用いられる。ただし、それぞれの用法における許容度は一定ではなく、付帯状態と並列においては「-て」の方が、開始時点においては「-てから」の方がより適格である（4節; 5.1.1節; 5.1.3節; 5.2.1節; 5.3節）。また、手段・方法、同時、原因・理由においては、「-てから」の方がより自然に感じられる。
4) 日田方言の「-てから」は、原因・理由の用法において、「-きー」と同様に用いられる。ただし、両者は終助詞的な用法の有無で異なる。「-きー」が終助詞的に用いられるのに対し、「-てから」はそうした用法を持たない（5.2.1節）。
5) 日田方言の「-てから」は、譲歩の用法において、「-けんど」「-けどが」と同様に用いられる。ただし、両者は終助詞的な用法の有無で異なる。「-けんど」「-けどが」が終助詞的に用いられるのに対し、「-てから」はそうした用法を持たない（5.2.2節）。

1. はじめに

大分県日田市方言（以下“日田方言”）には、連用形接続の「-てから」（<-て＋-から）[1] という接続助詞がある。形式的には現代標準日本語（以下“標準語”）の「-てから」と同じであるが、文法的特徴が異なる（以下、例文は問題の箇所のみ方言形式とし、カタカナで表記する）。

(1) 足を怪我してたのに、池田から蛍池まで歩イ<u>テカラ</u>帰った。‘…池田から蛍池まで徒歩で帰った’

(2) 岡田さんはワカク<u>テカラ</u>、全然元気がない。‘岡田さんは若いのに…’

1) /チカラ/（撥音便の後だと/ジカラ/）と発音されることもある。

(3)　長男は野球がウマクテカラ、次男はサッカーがうまい。‘長男は野球がうまい。一方、次男はサッカーがうまい’

(1) においては、「-てから」で標示された従属節の事態が、主節の事態を成立させるための手段・方法にあたる（以下、従属節の事態を“前件”、主節の事態を“後件”と呼ぶ）。(2) においては、前件と後件の結びつきが、話し手の知識に反するものとなっている。(3) においては、前件と後件の間に［修飾―被修飾］のような関係がなく、両者は並列されているだけである。こうした用法は、標準語の「-てから」には見られない。また、標準語の「-てから」が動詞にのみ後接するのに対し、日田方言の「-てから」は、(2, 3) からわかるように、形容詞などにも後接できる。

このように、日田方言の「-てから」には、標準語の「-てから」とは異なる文法的特徴がいくつか認められるのであるが、その詳細について論じた研究は、管見の限り見当たらない。そこで、本稿では、日田方言の「-てから」の用法を記述し、接続助詞体系における位置づけを明らかにする。

本稿の構成は次のとおりである。2節では、本稿のデータについて述べる。3節では、日田方言の「-てから」に見られる用法を定義する。4節と5節では、「-て」「-きー」[2]「-けんど」「-けどが」との比較をとおして、日田方言の「-てから」の用法を記述した。最後の6節はまとめである。

2.　データ

本稿における日田方言のデータは、全て僕の内省によるものである。僕は何度か転居を経験しているが、最も長い期間を大分県日田市で過ごしたこともあって、当地の方言を母方言としている。なお、僕の居住歴は次のとおりである。

0–3: 鹿児島県指宿市、3–14: 大分県日田市、14–18: 大分県佐伯市、18–22: 熊本県熊本市、22–23: 大阪府茨木市、23–: 大阪府豊中市（1980 年生まれ。数字は年齢）

3.　分析の枠組み

本節では、具体的な記述に入る前に、各用法の定義を明らかにする。

日田方言における「-てから」の用法は、標準語における「-てから」のそれよりも格段に広い。標準語の接続助詞で、日田方言の「-てから」に近いのは、むしろ「-て」である。よって、日田方言における「-てから」の用法を記述するにあたっては、標準語における「-て」の用法を記述した、森田 1989、仁田 1995、益岡 1997 などを参考にする。

標準語の「-て」と同じく、日田方言の「-てから」も、句（phrase）を標示するものと節（clause）を標示するものに分けられる。そして、その用法は、意味の面（前件と後件の

2)　長音化せず、/キ/と発音されることもある。

関係）から、次の5種8類に分類できる。

a) **句を標示する「-てから」**

1) **付帯状態**: 前件が、後件の成立時における状態を表すもの（e.g. 本を読ン**デカラ**歩いてたら、電柱にぶつかった）。

2) **手段・方法**: 前件が、後件を成立させるための手段・方法を表すもの（e.g. 足を怪我してたのに、池田から蛍池まで歩イ**テカラ**帰った）。

b) **節を標示する「-てから」**

3) **時間的関係**: 前件が、後件と何らかの時間的関係を結ぶもの。

3.1) **同時**: 前件の成立時が、後件のそれと重複ないし接触するもの（e.g. 崖から落チ**テカラ**けがをした）。

3.2) **継起**: 前件の成立時が、後件のそれと完全に隔絶しているもの（e.g. そんなにゲームがしたいのなら、宿題を終エ**テカラ**しなさい）。

3.3) **開始時点**: 前件が後件の開始時点を表すもの（e.g. 阪大に入ッ**テカラ**、毎日楽しく勉強してる）。

4) **条件**: 前件が後件の条件となるもの。

4.1) **原因・理由（＝順接）**：前件が、後件を成立させる原因・理由を表すもの（e.g. 天気がヨク**テカラ**[3]、洗濯物がすぐ乾いた）。

4.2) **譲歩（＝逆接）**：前件と後件の結びつきが、話し手の知識に反するもの（e.g. 岡田さんはワカク**テカラ**、全然元気がない）。

5) **並列**: 前件と後件の間に［修飾―被修飾］のような関係がなく、両者が並列されるだけのもの。（e.g. 長男は野球がウマク**テカラ**、次男はサッカーがうまい）。

上の分類には、意味的特徴のみならず、形式的特徴も反映されている。まず、「-てから」の後に休止（pause）が置かれるか否かによって、1, 2）と3–5）の間に境界線が引かれる。1, 2）の場合、「-てから」の後に休止を置くことは基本的に許されないが、3–5）においては許容される。

また、1, 2）と3–5）は、従属節と主節で主語が一致するか否かによっても区別される。1, 2）においては主語が常に一致するが、3–5）においては異なってもよい。

最後に、どのような用言を述語とするかに目を向けると、次のような違いが指摘できる。1–3.2）は、従属節も主節も必ず動態動詞述語となる。3.3）は、主節に限って、非動態動詞を述語とすることがある。4, 5）は、従属節も主節も述語の類型を選ばない。

次節以降、この分類に従って、「-てから」の用法を記述していく。記述にあたっては、「-てから」と共通の用法が認められる、「-て」「-きー」「-けんど」「-けどが」を比較対象

3) 形容詞の場合、似た形で「終止・連体形＋-でから」という形式も用いられる（e.g. 天気がイー**デカラ**、洗濯物がすぐ乾いた）。ただし、この形式は、「繋辞動詞連用形＋-から」（e.g. あの人は男**デカラ**、全然力がない）との関連で扱うべきものと考えられる。本稿の研究対象は連用形接続の接続助詞「-てから」であるから、「形容詞終止・連体形＋-でから」については、これ以上触れない。

とする。

4. 句を標示する「-てから」の用法

本節では、句を標示する「-てから」の用法を記述する。以下、付帯状態（4.1節）と手段・方法（4.2節）について記述をおこなう。

4.1. 付帯状態

付帯状態とは、前件が、後件の成立時における状態を表すものである。形態統語論的特徴としては、次の三点が挙げられる。

(4) a. 「-てから」の後に休止が置かれない。
b. 従属節の主語と主節のそれが一致する。
c. 従属節も主節も動態動詞述語である。

ただし、日田方言の「-てから」にとって、この用法はごく周辺的なものと思われる。なぜなら、付帯状態における「-てから」の使用は、全く許容されないとまではいかないものの、不自然に感じられるからである。付帯状態においては、「-てから」ではなく、「-て」を用いる方が自然である（例文中の“*”は文法的に不適格であることを、“?”は不自然であることを表す）。

(5) 昨日、家で白岩くんと飲んでいるとき、松丸さんが一升瓶を持ッ｛?テカラ／テ｝遊びにきた。

(6) 部屋でラジオを聴イ｛?テカラ／テ｝勉強した。

(7) 淡い色の服を着｛?テカラ／テ｝出かけた。

(8) 本を読ン｛?デカラ／デ｝歩いてたら、電柱にぶつかった。

ところが、話し手の否定的評価が加わると、次のように許容度が上がる[4]。

(9) ［文脈: 翌日に研究発表を控えていて、家でその準備をしていた］
昨日、真っ昼間から、松丸さんが一升瓶を持ッ｛テカラ／テ｝遊びにきた。

(10) ［文脈: 勉強に集中できる静かな図書館で勉強していた］
この間、図書館でラジオを聴イ｛テカラ／テ｝勉強してるヤツがいた。

否定的評価が加わると許容度が上がるということは、次のような用法と関係があるかもしれない。

(11) ［文脈: 磯野家では、サザエがマスオに、家計の負担になるから酒をやめるよう、常日頃から言っている。あるとき、サザエが帰ってくると、台所にビールの空き缶があった］
もう、マスオさんったら、またお酒飲ン｛デカラ／*デ｝。

---

4) このことは、並列を表す（56）（5.3節）にもあてはまる。

(12) ［文脈: 左官屋が昼休みで現場を離れている間、近所の子どもたちがきれいにならしたセメント面に踏み入って、さんざんに荒らしてしまった。昼休みを終えて、左官屋がそこに帰ってきた］
あっ、立ち入り禁止って書いてたのに、勝手に入ッ｛テカラ／*テ｝。

上の例では、話し手の否定的評価を表すために「-てから」が用いられている。このように、日田方言においては、「-てから」と否定的評価が結びついているのである。本来許容度が低いはずの（9, 10）においても、「-てから」が問題なく用いられるのは、否定的評価の表明が優先されているためと考えられる。

次の例は、手段・方法としても解釈できる、中間的な例である。

(13) ソファーに寝転ン｛デカラ／デ｝本を読んだ。

(14) ちゃんとヘルメットをカブッ｛テカラ／テ｝バイクに乗ってたのに、警察に止められた。

詳しくは4.2節で述べるが、手段・方法においては「-てから」が問題なく許容される。したがって、(13, 14) においては、「-てから」を用いても不自然な印象を受けない。

4.2. 手段・方法

手段・方法とは、前件が、後件を成立させるための手段・方法を表すものである。形態統語論的特徴は付帯状態に等しい（cf. (4)）。

この用法において、「-てから」と同様に用いられる接続助詞は、「-て」である。「-てから」でも「-て」でもどちらも許容されるが、前者の方がより自然である。

(15) 足を怪我してたのに、池田から蛍池まで歩イ｛テカラ／テ｝帰った。

(16) 友達と田んぼでカエルをツカマエ｛テカラ／テ｝遊んだ。

(17) 頭に当たりそうだったボールをシャガン｛デカラ／デ｝よけた。

(18) チョコレートを湯せんに入レ｛テカラ／テ｝溶かした。

(19) 蚊に刺されないよう、蚊帳を張ッ｛テカラ／テ｝寝た。

(20) 本が雨に濡れないよう、ビニール袋に入レ｛テカラ／テ｝運んだ。

先の付帯状態もそうであるが、この用法においては前件と後件の成立時が一致する（(15) であれば、「歩く」という事態の成立時は、「帰る」という事態のそれと同じである）[5]。ただし、(19, 20) における前件と後件の成立時は、完全には一致していない。前件の成立時と後件のそれが接触するという点で、次節で取り上げる同時に通じる。

5. 節を標示する「-てから」の用法

本節では、節を標示する「-てから」の用法を記述する。以下、時間的関係（5.1節）、条

5) 一つの事態を、異なる観点からとらえていると見ることもできそうである。ただし、Givón (1991) が述べるように、事態の単位を設定するのは困難なので、こうした考えはとりあえず保留しておく。

件（5.2節）、並列（5.3節）のそれぞれについて記述をおこなう。

5.1. 時間的関係

時間的関係とは、前件が、後件と何らかの時間的関係を結ぶものである。これには、同時（5.1.1節）、継起（5.1.2節）、開始時点（5.1.3節）の三つがある。以下、それぞれの用法について記述をおこなう。

5.1.1. 同時

同時とは、前件の成立時が、後件のそれと重複ないし接触するものである。次節で扱う継起もそうであるが、この用法の形態統語論的特徴としては、次の三点が挙げられる。

(21) a. 「-てから」の後に休止が置かれてもよい。
b. 従属節の主語と主節のそれが一致せずともよい。
c. 従属節も主節も動態動詞述語である。

この用法において「-てから」と同様に用いられる接続助詞は、「-て」である。どちらも問題なく許容されるが、前者の方がより自然に感じられる。

(22) 運転シヨッ｛テカラ／テ｝眠くなったので、車を止めて一眠りした。
(23) 押し入れの中に隠レトッ｛テカラ／テ｝、弟に見つかった。
(24) 崖から落チ｛テカラ／テ｝けがをした。
(25) カカーがパスを出シ｛テカラ／テ｝、インザーギが決めた。

(22, 23) においては、前件の成立時が後件のそれと重複しているが、(24, 25) においては、両者が接触しているだけである（重複的と接触的の違いは、前件のアスペクト的な意味が継続的か否かによる。cf. 工藤 1995: 第Ⅲ章)。ただし、(22–25) からわかるように、同時性が重複的であるか接触的であるかは、許容度に影響しない。

5.1.2. 継起

継起とは、前件の成立時が、後件のそれと完全に隔絶しているものである。前節で述べたとおり、形態統語論的特徴は同時と同じである（cf. (21))。

継起においては、「-てから」のみが使用される。この用法において「-て」を用いると、不適格になる。

(26) そんなにゲームがしたいのなら、宿題を終エ｛テカラ／*テ｝しなさい。
(27) 病院に寄ッ｛テカラ／*テ｝会社に行ったので、出勤時間に遅れてしまった。
(28) 子供たちが帰ッテキ｛テカラ／*テ｝準備をしたので、夕飯の時間がかなり遅くなった。
(29) ［文脈: Windows の最新版の購入時期について考えている］
今すぐ欲しいというほどじゃないから、値段が下ガッ｛テカラ／*テ｝買おう。

前節で確認したとおり、「-てから」は同時としても使用可能なため、次の例においては、二通りの解釈が生じる。

(30) 友達の家に遊びに行ッテカラ、勉強した:

a. ‘友達の家に遊びに行って、そこで勉強した’ 【同時】

b. ‘友達の家に遊びに行ったあと、塾かどこかで勉強した’ 【継起】

(31) お風呂に入ッテカラ、ビールを飲んだ:

a. ‘お風呂に入って、そこでビールを飲んだ’ 【同時】

b. ‘お風呂に入ったあと、台所かどこかでビールを飲んだ’ 【継起】

5.1.3. 開始時点

開始時点とは、前件が後件の開始時点を表すものである。同時や継起との唯一の違いは、主節の述語が非動態動詞でもよいという点である。この用法において「-て」を用いるのは不可能ではないが、かなり不自然に感じる。

(32) 阪大に入ッ{テカラ／?テ}、毎日楽しく勉強してる。

(33) あの選手は巨人に移ッ{テカラ／?テ}、ずっと調子がよくない。

(34) イケメンの太郎が入ッテキ{テカラ／?テ}、面食いの花子は毎日機嫌がいい。

(35) あの人は、奥さんが家を出テ行ッ{テカラ／?テ}、ずっと元気がない。

5.2. 条件

条件とは、前件が後件の条件となるものである。これは、原因・理由（5.2.1節）と譲歩（5.2.2節）に分けられる。以下、それぞれの用法について記述をおこなう。

5.2.1. 原因・理由

5.2.1.1. 接続助詞としての用法

原因・理由とは、前件が、後件を成立させる原因・理由を表すものである。形態統語論的特徴としては、次の三点が指摘できる。

(36) a. 「-てから」の後に休止が置かれてもよい。

b. 従属節の主語と主節のそれが一致せずともよい。

c. 従属節も主節も述語を選ばない。

この用法において「-てから」と同様に用いられる接続助詞は、「-て」と「-きー」である。後者は原因・理由を表す接続助詞であり（標準語の「-から」に相当）、これを用いた方が、原因・理由の表現であるという意図が明確に伝わる。

(37) 天気が{ヨクテカラ／ヨクテ／イーキー}、洗濯物がすぐ乾いた。

(38) 隣の部屋は、大男がたくさんオ{ッテカラ／ッテ／ルキー}、暑苦しい。

(39) ［文脈: ジャイ子はジャイアンの愛妹である］

ジャイ子が泣カサレ {テカラ／テ／タキー}、ジャイアンが怒った。

(40) 砂糖を入レスギ {テカラ／テ／タキー}、ものすごく甘い。

(41) 毎日勉強シヨ {*ッテカラ／*ッテ／ーキー}、成績がぐんぐん上がってる。

(42) 岡田さんの財布はカードだのレシートだのを詰メ込ンジョ {*ッテカラ／*ッテ／ーキー}、ぱんぱんだ。

(37–40) からわかるように、述語が動態動詞か否かは許容度に影響しない。しかし、(41, 42) のように、標準語の「-て（い）る」に相当するアスペクト標識「-よる」「-ちょる」が標示されると、「-てから」と「-て」が用いられなくなる。

5.2.1.2. 終助詞的な用法

日本語においては、原因・理由を表す接続助詞が、しばしば終助詞のように用いられる。たとえば、標準語においては、「-から」や「-し」が次のように用いられる。

(43) ［文脈: 森田くんは、女子大生とのコンパに誘ってもらえなかったと思い込んでいる］

森田: ってか、何でオレも呼んでくれないんすか？

平塚: いや、こないだちゃんとメールした {から／し}。

(44) ［文脈: 女子高生二人が、“リラックマ”という、なごみ系のキャラクターを初めて目にする］

美子: ねえねえ、ちょっとさー、これ見てー。かわいくない？

真弓: 何これー、かわいー。ってか、クマなのに、なんか寝袋に入ってる {*から／し}。

日田方言では、「-きー」に (43) のような用法が認められる。しかし、「-てから」はどちらの用法も持たず、終助詞的に用いることができない。

(45) ［文脈: (43) と同じ］

森田: ってか、何でオレも呼んでくれないんすか？

平塚: いや、こないだちゃんとメールシ {*テカラ／タキー}。

(46) ［文脈: (44) と同じ］

美子: ねえねえ、ちょっとさー、これ見てー。かわいくない？

真弓: 何これー、かわいー。ってか、クマなのに、なんか寝袋に入ット {*ッテカラ／*ーキー}。

5.2.2. 譲歩

5.2.2.1. 接続助詞としての用法

譲歩とは、前件と後件の結びつきが、話し手の知識に反するものである（譲歩に関する議論は、衣畑 2003; 2005 などに詳しい）。形態統語論的特徴は原因・理由と同じである。

この用法において「-てから」と同様に用いられる接続助詞は、「-けんど」と「-けどが」である（(49, 51) においては、「-て」を用いるのも不可能でない。しかし、実際にこれを使うことはないように思う)。「-けんど」と「-けどが」は譲歩を表す接続助詞であり（標準語の「-け（れ）ど」に相当)、これらを用いると譲歩の表現であることが明確になる。

(47) 試合で負ケ｛テカラ／タケンド／タケドガ｝、監督が褒めてくれた。

(48) ちゃんと焼イ｛テカラ／タケンド／タケドガ｝、中は生のままだ。

(49) 毎日ちゃんと勉強シヨ｛ッテカラ／ーケンド／ーケドガ｝、成績が下がった。

(50) 十分寝ト｛ッテカラ／ーケンド／ーケドガ｝、まだ眠い。

(51) すごく調子がヨ｛クテカラ／カッタケンド／カッタケドガ｝、試合に負けてしまった。

(52) 岡田さんはワ｛カクテカラ／ケーケンド／ケーケドガ｝、全然元気がない。

「-て」は原因・理由だと使用できるが（ただし、(41, 42) では不可)、譲歩になると極端に許容度が下がる。(47, 49) のように、従属節も主節も動態動詞述語であれば、形態統語論的特徴は同時と同じはずであるが、「-て」は許容されない（この現象は、原因・理由を表す (39) と対照的である)。

5.2.2.2. 終助詞的な用法

日本語においては、譲歩を表す接続助詞にも終助詞的な用法がある。たとえば、標準語においては、「-けど」が次のように用いられる（なお、音韻的退行が起きていない「-けれど」だと、著しく許容度が下がる)。

(53) ［文脈: (43) と同じ］
森田: ってか、何でオレも呼んでくれないんすか？
平塚: いや、こないだちゃんとメールした**けど**。

文法的な意味は前掲 (43) と同様である。日田方言では、「-けんど」と「-けどが」にこのような用法が認められる。しかし、「-てから」はこうした用法を持たず、終助詞的に用いることができない。

(54) ［文脈: (43) と同じ］
森田: ってか、何でオレも呼んでくれないんすか？
平塚: いや、こないだちゃんとメールし｛*テカラ／たケンド／たケドガ｝。

5.3. 並列

前件と後件の間に［修飾—被修飾］のような関係がなく、両者が並列されるだけのものである。形態統語論的特徴は条件の二つと同じである。

この用法において「-てから」と同様に用いられる接続助詞は、「-て」である。ただし、前者で並列を表すにあたっては、いくつかの条件が満たされなければならない。一方、後

者にはそうした制限がない。したがって、この用法においては、「-て」を用いる方がより自然と考えられる。

(55) 磯野家の人たちと楽しく歌ッ {*テカラ／テ} 踊った。

(56) 波平が踊ッ {?テカラ／テ}、フネが手拍子をとった。

(57) 出来杉くんは頭がヨク {テカラ／テ}、運動神経もいい。

(58) 長男は野球がウマク {テカラ／テ}、次男はサッカーがうまい。

(55) のように、従属節と主節が同じ主語をとり、かつ、両者とも動態動詞述語の場合、「-てから」は不適格となる。(56) のように、従属節と主節で主語が異なると若干許容度が上がるが、それでもまだ不自然である。(57, 58) のように、従属節も主節も非動態動詞述語であれば、完全に許容される。

次に挙げる例は、一見すると並列のようであるが、前件と後件の間に因果関係がある ((59, 60))、あるいは、前件と後件の関係が話し手の知識に反する ((61, 62)) と感じられる。そのため、原因・理由や譲歩の解釈が成り立つ。

(59) 相撲取りは体が大キク {テカラ／テ}、手も大きい。

(60) お父さんは大病院で医者をショッ {テカラ／テ}、息子は都内の名門私立校に通ってる。

(61) あの先生は女にはア {マクテカラ／マクテ}、男には辛い。

(62) 茂雄は野球がウ {マクテカラ／マクテ}、一茂は下手だ。

6. まとめ

本稿では、「-て」「-きー」「-けんど」「-けどが」との比較をとおして、日田方言の「-てから」の用法を記述した。その結果、以下のことが明らかになった。

1) 日田方言の「-てから」は、標準語の「-てから」よりも用法が広い (1 節; 3節)。

2) 相対的に見て許容度が低い付帯状態と並列は、日田方言の「-てから」にとって周辺的な用法である (4.1節; 5.3節)。

3) 日田方言の「-てから」は、付帯状態、手段・方法、同時、開始時点、原因・理由、並列の用法において、「-て」と同様に用いられる。ただし、それぞれの用法における許容度は一定ではなく、付帯状態と並列においては「-て」の方が、開始時点においては「-てから」の方がより適格である (4節; 5.1.1節; 5.1.3節; 5.2.1節; 5.3節)。また、手段・方法、同時、原因・理由においては、「-てから」の方がより自然に感じられる。

4) 日田方言の「-てから」は、原因・理由の用法において、「-きー」と同様に用いられる。ただし、両者は終助詞的な用法の有無で異なる。「-きー」が終助詞的に用いられるのに対し、「-てから」はそうした用法を持たない (5.2.1節)。

5) 日田方言の「-てから」は、譲歩の用法において、「-けんど」「-けどが」と同様に

用いられる。ただし、両者は終助詞的な用法の有無で異なる。「-けんど」「-けどが」が終助詞的に用いられるのに対し、「-てから」はそうした用法を持たない(5.2.2節)。

1–5) を表にまとめると、次のようである。

表1 日田方言における接続助詞の用法

			3)時間的関係			4)条件		
	1)付帯	2)手段	3.1)同時	3.2)継起	3.3)開始	4.1)原因	4.2)譲歩	5)並列
-てから	← - -	———	———	———	———	———	———	- - →
-て	←	———	———	- - - -	·····	———	———	→
-ぎー						←——→		
-けんど、-けどが							←——→	

———　：文法的に適格
- - - -　：文法的に不自然、あるいは、述語の類型によっては不適格
·····　：文法的に不適格

表1からもわかるように、日田方言における「-てから」の用法は、「-て」のそれと重複するところが多い。ただし、上で述べたように、それぞれの用法における許容度は一定ではない。そのため、両者は:

(63) a. 「-てから」：手段・方法、同時、継起、開始時点、原因・理由
　　 b. 「-て」　　：付帯状態、並列

のような棲み分けがあると見ることもできる。

なお、標準語においては、「-てから」と「-て」が、次のように使い分けられている。

(64) a. 「-てから」：継起、開始時点
　　 b. 「-て」　　：付帯状態、手段・方法、同時、原因・理由、並列

奪格助詞「-から」が表す意味の一つとして、空間的ないし時間的な起点の指示が挙げられる。「-から」のこうした意味を踏まえると、日田方言にも、かつては (64) のような使い分けが存在したと推測される。そこから、「-てから」が次第に用法を広げていき、「-て」の意味領域に割って入ったと考えられる。今のところ、付帯状態と並列の許容度は低い(あるいは、部分的にしか許容されていない) が、今後、これらにおいても、問題なく用いられるようになることが予想される。

このように考えたとき、問題となるのは譲歩である。この用法においては、そもそも「-て」が許容されないため、ここにおいて「-てから」が用いられる理由は、他に求める必要がある。これについては、今後の課題としたい。

【参考文献】

衣畑 智秀（2003）「ノニ、クセニ、ニモカカワラズ」、『日本語文法』3-1、pp. 3–18、日本語文法学会

――――（2005）「日本語の「逆接」の接続助詞について――情報の質と処理単位を軸に――」、『日本語科学』17、pp. 47–64、国立国語研究所

工藤 真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテクスト――現代日本語の時間の表現――』、ひつじ書房

仁田 義雄（1995）「シテ形接続をめぐって」、仁田義雄（編）『複文の研究（上）』、pp. 87–126、くろしお出版

益岡 隆志（1997）『現代日本文法選書 2　複文』、くろしお出版

森田 良行（1989）「～て　助」、『基礎日本語辞典』、pp. 752–57、角川書店

Givón, Talmy. (1991) Serial verbs and the mental reality of 'Event': Grammatical vs. cognitive packaging. In Traugott & Heine. (ed). (1991). *Approaches to Grammaticalization*. Vol. I. pp. 81–127. Amsterdam/Philaderphia: John Benjamins.

くろき くにひこ（大阪大学大学院生）

E-mail: jeanpaulgaultierhomme@yahoo.co.jp